

保育者養成教育における実習前不安に関する一考察

中原 大介

福山平成大学 福祉健康学部
(こども学科)

E-mail : nakahara@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本稿では保育者養成教育において、実習生が実習前に感じている不安について考察を行った。まず、平成30年度に行われた「保育実習実施基準」の改定について言及した。指定保育士養成施設では「保育実習実施基準」に基づいて保育実習を実施することが求められている。さらに養成校で実施される「保育実習指導」について、保育実習の意味や目的をしっかりと学生に理解させ、現場に送り出すことが求められてきた。また、今回の実施基準の改訂では現場での協働や養成校教員間での協働などがより求められるようになった。この様に、より実践力のある保育士養成には「協働」が欠かせないとしている。一方で、実際の実習指導の中では社会人としてのマナーを伝え、学生の抱える不安を解消する必要もあり、実習指導に占めるその割合は少なくない。

保育（教育）実習に関わる不安に関する研究は数多くあり、先行研究から学生がどのような不安を示しているかについて概観を行った。また、養成校で行った自由記述アンケートを分析し、不安について検討を行った。

結果、学生は「日誌・指導案」や「ピアノ」などに関して、実習前の不安を抱えている傾向が強いことが分かった。今後、これらの客観的なエビデンスに基づいた実習指導をより充実させていく方策を検討することが課題であると考えられる。

KEY WORDS : 保育士養成課程・保育実習指導・不安

1. はじめに

保育士資格を取得しようとする学生にとって、養成校における日常的な学習に加え、現場における実習も重要となる。

学生は養成校を離れ、「保育実習Ⅰ」においては保育所10日間、施設10日間、さらに選択必修科目「保育実習Ⅱ」および「保育実習Ⅲ」において、保育所もしくは施設における実習を10日間行うことになっている¹⁾。

学生にとってみれば、現場にいる子どもたちと関わることができるという期待感が高くなる一方で、現場で求められる技術や指導案の作成など不安に感じることも多くなっている。この様な保育実習に臨む学生の不安に関する研究も多くあり、Ciniiで「保育実習 不安」というキーワードで検索をかけると39件の論文が確認された²⁾。保育実習は学生にとって自身のキャリア構築の上で、大きな期待と不安を抱きながら取り組むものであり、養成校や研究者はその指導方法や内容について工夫や研究を積み重ねている。

実習に向けてできうる限りその不安を解消し、実りある実習を学生が行えるよう、それぞれの保育実習について「保育実習指導」が設定されている。各養成校において、この保育実習指導の教授内容は厚生労働省の通知をベースとしながら工夫され、実施されている。

本研究では、保育実習に向かう学生の不安に関し、保育実習の現状について概観し、また実習生の不安についての先行研究をレビューする。その後、ある養成校（A校と表記する）における事前アンケートの分析を元に、実習前に学生が抱える不安について、不安軽減につながる実習事前指導のあり方を検討することとする。

今回はA校の実習生における実習に対する不安要素を概観し、A校の特徴と先行研究における不安要素について比較検討を行うことを中心とする。

2. 保育実習の事前指導について

本章では厚生労働省が指定保育士養成施設に向けた通知を元に、実習事前指導の内容について概観する。

1) 保育実習実施基準

指定保育士養成施設における保育実習については、厚生労働省（平成13年6月29日雇児発第438号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の別紙2 保育実習実施基準（以下、実施基準）において提示されている

³⁾。その内容としては、「保育実習の目的」、「履修の方法」、「実習施設の選定等」と指定保育士養成施設における保育実習の実施について、様々な規定がなされている。これまで保育所保育指針、保育士養成課程の変更に伴い、実施基準も変更されてきた。

現行の実施基準は平成30年4月27日の「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準についての一部改正について（厚生労働省子ども家庭局長 子発0427第3号）によるものである。その改定内容については、「保育士養成課程等については、保育を取り巻く社会情勢が変化する中、保育所保育指針（平成29年3月31日厚生労働省告示第117号）が平成30年4月1日から適用されたこと等を踏まえ、より実践力のある保育士の養成に向けて、『保育士養成課程等検討会』（以下「検討会」という。）において見直しの検討を行った」とされている⁴⁾。今回の実施基準の改定では「第2 履修の方法」の5において、「この計画において、全体の方針、実習の段階、内容、施設別の期間、時間数、学生の数、実習前後の学習に対する指導方法、実習の記録、評価の方法等を明らかにし、指定保育士養成施設と実習施設との間で共有すること。」とし、旧実施基準よりも実習計画や評価基準の共有についてより強く打ち出されている⁵⁾。また、実習指導者の基準についても、指定保育士養成施設の指導者については「当該実習指導者は、他の教員と連携して実習指導を一体的に行うこと。」という文言が追加され、養成校の教員が一体となって実習指導に取り組む意味合いが強くなっている⁶⁾。また実習の実施に当たっては、新たに項目が書き起こされ「保育実習の実施に当たっては、保育実習の目的を達成するため、指定保育士養成施設の主たる実習指導者のみに対応を委ねることのないよう、指定保育士養成施設の主たる実習指導者は、他の教員・実習施設の主たる実習指導者等とも緊密に連携し、また、実習施設の主たる実習指導者は、当該実習施設内の他の保育士等とも緊密に連携すること。」とし、実習指導に当たる教員に対し前述のように養成校の他の教員との連携を強め、さらに実習施設との連携をより緊密にとり、実習生にとってより実りある実習を実施できる環境作りが求められるようになってきている⁷⁾。本実施基準の改正は「より実践力のある保育士の養成」が目的とされており、この様な実施基準の大きな変更からも保育実習が「実践力」のある保育士養成に大きな役割を担っていることが理解できる。

現行の保育実習は保育実習Ⅰ（20日以上 4単位 必修）及び保育実習指導Ⅰ（2単位 必修）、保育実習Ⅱ（10日以上 2単位 選択必修）、保育実習Ⅲ（10日以上 2単位 選択必修）、保育実習指導ⅡもしくはⅢ（1単位 選択必修）となっている。

かつては選択必修科目であった保育実習Ⅱおよび保育実習Ⅲについては、養成校内で実施する保育実習指導については科目の設定がされておらず、2010年7月22日付け通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準についての一部改正（雇児発0722第5号）において、単位が設定されることとなった。

これまでの実施基準の変更を見る限り、現場や養成校内での協働が求められ、さらに実習指導の時間を増やしたカリキュラムに改定されており、このことから実習指導の重要性は増していると考えられる。

2) 教科目としての「保育実習指導」

前述の実施基準には養成校内で実施される「保育実習指導」に関わる記述はないが、教科目としての「保育実習指導」について「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の別添1において示されている。

保育実習指導Ⅰにおいては、以下のようにその目標について述べられている⁸⁾。

1. 保育実習の意義・目的を理解する。
2. 実習の内容を理解し、自らの実習の課題を明確にする。
3. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。
4. 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。
5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習に向けた課題や目標を明確にする。

また、保育実習指導Ⅱおよび保育実習指導Ⅲは以下の内容が目標として示されている⁹⁾。

1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。
2. 実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を習得する。
3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について、実践や事例を通して理解する。
4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。
5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を

行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

いずれの保育実習指導においても、保育実習の意義や目的を理解すること、またその為に必要とされる観察・記録や評価方法等について現場で学習するための事前学習がその中心となっている。

しかしながら、保育実習を実施する際には、実習に向けた書類の作成や社会人としてのマナーを学ぶ内容など、厚生労働省が教科目の内容として提示していない内容に多くの時間が割かれていることも実態としてある¹⁰⁾。また、中原は実習指導のテキストにおいても「第2章においては『子どもに対する態度・行動』や『施設職員に対する態度・行動』などという項目が挙げられ、実習生としての心構えについて記述されている。また、電話のかけ方や実習の事前オリエンテーションに関する項目、実習計画の課題設定や日誌の書き方といった実習実務についての記述も見ることができた。」¹¹⁾というように、実習そのものの目的について学習するだけでなく、実習生としての心構え・マナーについても実習指導内で教授する必要があると考えられる。

3. 保育実習に関わる「不安」について

前述のように保育実習指導においてはその目的として、保育実習の目的や目標を理解し、実習をよりよいものとするための取り組みが設定されている。それ以外にも実習に関わる事務手続きや実習に関する不安を解消するための取り組みも必要となる。中原は「実習生は子どもとの関わりや、保育技術、養護施設における対象児の理解など、保育実習で学習すべき内容についての不安、ストレスを述べる場合が多い。また同時にそれ以上に他の事柄について不安を抱くことも多い。具体的には実習先の職員とうまくやっていけるかどうかという『大人との関係』に悩みを持つ、また実習そのものに対し自信がない等の不安を持つことも多い。」¹²⁾として、実習生が事前に抱えるであろう不安について述べており、また実習テキストにおいても「第3章において実習に関するQ & Aになっており、その項目の中にも『実習前の質問』ということで事前指導に該当する部分が見受けられた。とくに、その項目では『実習が不安である』など実習生の事前に作るべき心構えなどについて取り扱われているように思われる。」として、市販テキストにも保育実習前の不安に関わる記述があることについて言及している¹³⁾。

本章では、保育実習に関わる不安について先行研究を

中心に概観を行う。

岡本は「実習に対する保育専攻学生の意識についての一考察」として、質問紙調査を行っている。その中で実習に関する不安の因子として6因子を抽出しており、第1因子は「実技への不安」とし保育実技の指導や援助（造形表現指導）、時間管理や事務的な手続き、保育実技（指導を伴わない造形表現）、保育実技の指導や援助（運動遊び指導）、保育実技の指導や援助（手遊び・リズム遊び・歌・ピアノ等）、部分実習（指導案の期日提出）、子どもたちとの関わり等としている。また、第2因子を「指導への不安」とし、部分実習（振り返りや、指導案の内容、教材の選び方、当日の実践）に関わる内容について記述している。第3因子を「課題と人間関係への不安」とし、毎日の自己課題の発見、実習記録（毎日の作成）、保育者との関わりなどとしている。第4因子は「理論と実践への不安」とし、実習記録（内容や程度）、保育実技（絵本の読み聞かせや、紙芝居の実演）などをあげている。第5因子は「基本への不安」として挨拶など、第6因子は「健康への不安として」健康状態の管理（身体的疲労、精神的疲労）などをあげていた¹⁴⁾。

守屋らの研究では、幼稚園実習へ臨む学生たちに対し「実習に行くにあたって心配なことや不安な事は何ですか？」という質問を行っている。その分析の結果、実習に関する不安について大きく3つのカテゴリーに分類している。まず「保育に関すること」として、「保育の指導」や「日誌・指導案」、「保育技術」、「教師としての役割」、「幼児への関わり」という項目を設定している。第2のカテゴリーとして、「園内の人間関係に関すること」として、「教師との人間関係」、「幼児との信頼関係の構築」、「他の実習生との協働」という下位カテゴリーを設定している。第3のカテゴリーとしては、「社会人・職業人としての意識に関すること」として、「体調管理や精神的ストレス」、「弁当」、「通勤」、「積極性」、「言葉遣い」などの下位カテゴリーを設定している¹⁵⁾。

また、金子らは「保育実習生のストレス対処に関する研究」として、実習が終了している学生に対して実習経験別の困難とその対処について分析を行っている。その中で、実習中の困難とその対処のカテゴリーとして7つのカテゴリーをあげている。「とまどい」、「子どもへの対応」、「日誌」、「健康」、「先生との関係」、「指導実習」、「園の様子」という7つのカテゴリーであ

る¹⁶⁾。

大和田らは保育士資格を取得した卒業生に対してアンケートを実施し、「保育士養成課程における施設実習の維持と意識の変化」として「施設実習を行う前の気持ち」について調査を行っている。本研究では施設実習（養護系施設、障がい系施設）として実習を行う前の気持ちについての記述を分析し、「不安」、「戸惑い」、「関心がある」と3つのカテゴリーに分類をしている¹⁷⁾。

山本らは保育実習指導における「学びの共有」の有効性として、保育実習指導1履修生に対して、保育実習終了後に質問紙調査を実施している。その中で、保育実習前の不安として自由記述の内容を分類整理し、カテゴリー化している。結果、最も多かったものは「日誌の書き方」と「保育士との関係」であったとしている。また、その他に多かったものでは、「指導案」、「部分実習」、「ピアノ」と続く¹⁸⁾。

渡邊は専門学校生に対して質問紙調査を実施し、実習生の不安に関して、記述数が多かった内容を中心に21項目を集約し、「実習不安尺度」の項目を作成している。その項目は「子ども同士のケンカに対応すること。」や「指導案や日誌を書くこと」、「実習先の職員とコミュニケーションをうまくとること」、「ピアノの技術や歌が上手く歌うこと」、「子どもと上手くコミュニケーションをとること」などであった。さらに、その「実習不安尺度」を活用し、因子分析を行い、3つの因子を提示している。第1因子は「子どもへの対応と保育実践に関する不安」であり、「子ども同士のケンカに対応すること」や「指導案や日誌を書くこと」、「ピアノの技術や歌を上手く歌うこと」などがあった。第2因子としては、「実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安」とし、「実習先で指示された通りに対応すること」や「実習先の職員とコミュニケーションをうまくとること。」などがあげられており、第3因子として「実習先の職員との関係に対する不安」として、「実習先での実習生に対する態度が好意的でないこと」などといった要素があげられていた¹⁹⁾。

田中らは先行研究から得られた項目を元に「子どもへの対応不安」、「部分・責任実習不安」、「実習生適応」、「体調管理不安」といった項目を取り上げ、「不安感の構成モデル」作成を行っている。「子どもへの対応不安」因子としては「子どもがケガをした時に適切に対応できるか不安だ。」や「子どもの発達段階や興味に応じた製作活動を提案できるだろうか。」といった内容を

取り上げている。「部分・責任実習不安」因子としては「部分・責任実習の指導案を書くことができるか心配だ。」や「実習で、上手にピアノを弾けるかどうか心配になる。」といった内容を取り上げている。「実習生適応」因子では「実習担当の先生と良好な関係が築けるか不安だ。」や「実習先の方針に合わせることができるか不安だ。」という項目が取り上げられている。「体調管理不安」因子では「実習期間中に、体調をくずさないか心配になる。」などが挙げられていた²⁰⁾。

岩崎の「保育実習に関する不安調査からの一考察」においては、保育実習において不安に感じるものとして、10項目の質問項目から3種類の因子を分類している。第1因子を「対人接触への不安」とし、関連が強い質問項目として「一人一人の子どもへの接し方の不安」や「保護者との接し方の不安」、「実習先の先生との接し方の不安」などがあげられていた。第2因子を「保育技術への不安」とし、「実習日誌を書くことの不安」、「ピアノや造形の技術の不安」などが関連の強い項目としてあげられていた。第3因子としては「保育場面以外の不安」とされており、「教材作りや指導案作成の不安」や「実習日誌を書くことの不安」などが関連の強い項目としてあげられていた²¹⁾。

これまで取り上げてきた先行研究を概観する限り、実習生が不安を感じている項目として共通している要素が数点ある。まず、日誌や指導案の作成といった「文書作成を伴う実習内容」、また「実技（主にピアノがあげられることが多い）を伴う実習内容」、さらに「人間関係」（実習園の先生、他の実習生、実習園の子ども）に対するもの、最後に「自身の体調」に関わる不安が共通の項目であると考えられる。

この様に、保育実習前の学生はこれらの項目について不安を感じている傾向が強いと考えられる。

4. A校における実習事前アンケート分析

本章では、保育士養成課程を持つA校（4年制大学）において実施した実習事前アンケート分析から、学生が実習前に感じている不安について検討を行う。

先行研究においては質問紙による量的調査が中心となっており、自由記述などを活用しテキストマイニングの手法を用いて調査している文献は少数であった。KHCoderを用いた実習前不安に関する研究では三澤による研究などがあるが、三澤は特に「実習における対人コミュニケーション」に焦点を当てた調査であった

²²⁾。また、吉田が実習前後において学生の自由記述による簡条書きを分析することで「実習について不安なこと」に関する分析を試みている。吉田は教員による手作業での分類整理による分析を手法として用いていた²³⁾。

そこで、本研究では学生が実習前に自由に記述した不安に関する文章をKHCoderによるテキストマイニングを実施することで、学生のより自由な感覚に基づいた記述から不安要素を抽出できると考えた。

1) 実施内容

保育実習に関わる「保育実習指導」授業内で質問紙を用い、自由記述方式で実施した。質問紙の内容は以下の通りである。

保育実習、保育実習指導（授業）で「心配なことや不安に思うこと」、「相談したいこと」、「事前に勉強をしておきたい」、「事前に知りたいと思うこと」などを教えてください。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 心配なことや不安に思うこと 2. 事前に勉強をしておきたい、事前に知りたいと思っていること 3. 相談したいこと |
|---|

調査の実施に当たっては回答の有無によって授業成績に影響がないこと、個人が特定できない形でデータ化し、授業改善及び研究に活用し、外部に発表することがあること、データの使用拒否が可能であることを口頭及び文書で対象学生に伝達した。

- ・2016年実施（保育実習指導Ⅰ履修者 33名 回答者 33名）
- ・2018年実施（保育実習指導Ⅰ履修者 35名 回答者 34名 内データ使用拒否1名）
- ・2018年実施（保育実習指導ⅡおよびⅢ履修者 28名 回答者25名 内データ使用拒否1名）

2) 分析方法

質問紙によって得られた自由回答の内容をエクセルデータに書き起こし、KHCoderを用いてテキストマイニングによる分析を行った²⁴⁾。

本研究では、全ての年度及び調査実施年度ごとに得ら

れた各項目の頻出語リストを対象に分析する。

3) 結果

全ての年度のデータを分析したところ、項目1「心配なことや不安に思うこと」では「実習」、「不安」、「保育」といった言葉が上位に抽出された。その後、「心配」、「施設」、「ピアノ」、「子ども」、「思う」、「指導」と続いていく。(表1)本質問紙が保育実習全体、つまり保育所実習、施設実習両方を対象としているため、「施設」という言葉も上位に上がってきていると考えられる。

また、「日誌」や「部分」といった言葉は実習日誌や部分実習を指していると考えられ「文書作成を伴う実習内容」に関する内容に対して全体的に不安が高いと考えられる。

項目2「事前に勉強をしておきたい、事前に知りたいと思っていること」では「保育」「知る」「子ども」という言葉の後に、「施設」、「手遊び」、「ピアノ」と続いていく。学生が事前に準備が必要であると考えている事柄は、「ピアノ」や「手遊び」といった「実技を伴う実習内容」であることが推測される。

項目3「相談したいこと」においては「特に」という単語がトップに来ており、これは「特にない」「特になし」という文章から抽出されたものだと考えられる。

2016年実施の調査結果は、次のような内容であった。(表2)項目1については、「不安」、「実習」、「施設」、「心配」と続き、ここでも「施設」という言葉が抽出されており、施設実習に関する不安を学生が持っていると考えられる。また、下位ではあるが「知的」という言葉も抽出されており、知的障がい児・者施設での実習に関する記述があったと考えられる。

また「ピアノ」「日誌」という言葉も抽出されており、同じく「文書作成を伴う実習内容」、「実技を伴う実習内容」に不安を感じているであろう事が理解できる。

項目2については、順に「施設」、「ピアノ」、「乳児」、「手遊び」という言葉が上位に並んでおり、施設実習に関わる内容やピアノ、手遊びといった実技に関する準備、また乳児に関わる経験が少ないことから、乳児に関する学習も必要であると考えていることが分かる。

項目3においては、「コミュニケーション」という言葉が出てきており、人との関わり(子どもや入所児者、実習施設の指導者)について、何らかの悩みを抱えていることも理解できる。

2018年実施の調査は初めて実習を行う学生とすでに保育実習Ⅰを終了し、保育実習Ⅱ・Ⅲを実施前に調査を行った学生を対象に調査を行っている。まず、初めて実習を行う学生について分析を行う。(表3)

項目1に関しては、「保育」、「指導」、「不安」、「部分」、「全日」と言葉が並んでいる。ここでも、指導案の作成に関する言葉が並んでおり、学生が不安に感じている項目であることが理解できる。その後「日誌」、「書き方」、「書ける」といった言葉が上位にきている。

その後、このグループだけに見られる単語であるが「朝」や「起きる」という言葉が出現している。このことは実習に関わり、通常より早く起床して実習先に向かうことなどが求められることから、自身が遅刻をしないか朝起きることができるかどうかに関して不安を感じていることが現れている。

項目2については、「保育」、「部分」、「手遊び」と行った言葉が並び、部分保育に関する準備や手遊びといった実技を伴う実習内容に関しても準備が必要であると感じているようであった。また、ここでも「乳児」や「発達」という言葉も抽出されている。

項目3については、ここでも「特に」という言葉がトップに来ており、特に相談事項がないとなっているようであった。

次に2018年実施の調査のうち、2回目の保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲに臨む学生について分析を行う。(表4)

項目1に関しては、「実習」、「ピアノ」、「保育」、「行う」、「子ども」、「体調」、「通勤」という言葉が並んでいる。その後「期間」や「時間」などの言葉が続き、「設定」という文言がその後に出てくる。これまでの年度に比べて、「設定」という言葉の順位が低くなっている。

項目2に関しては、「利用」、「保育」、「教材」、「研究」、「年齢」などの言葉が抽出されており、その後「勉強」、「勤務」と続く。学生が事前に準備をすることについても、これまで見られなかった、より具体的な「教材研究」や、「子どもの年齢に合わせた」教材研究を行うことの必要性を学生が感じているように思われる。

項目3に関しては、これまで同様「特に」という言葉がトップに来ており、特に質問がないとの回答が多く見られた。

保育者養成教育における実習前不安に関する一考察

表1 2016～2018年度 自由記述抽出語一覧

(項目1)		(項目2)		(項目3)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
実習	33	保育	26	特に	12
不安	30	知る	17	実習	5
保育	29	子ども	12	良い	5
心配	18	施設	12	不安	4
施設	16	手遊び	11	コミュニケーション	3
ピアノ	15	ピアノ	10	ボランティア	3
子ども	15	実習	10	行く	3
思う	13	乳児	10	指導	3
指導	13	利用	9	事前	3
日誌	13	思う	8	場合	3
行く	9	発達	8	人	3
部分	9	部分	7	先生	3
分かる	9	勉強	7	保育	3
設定	8	設定	6	無い	3
時間	7	年齢	6	可能	2
書ける	7	障害	5	気	2
先生	7	良い	5	苦手	2
全日	7	もう少し	4	思う	2
体調	7	教材	4	施設	2
関わり	6	研究	4	少し	2
言う	6	言う	4	接す	2
生活	6	指導	4	洗濯	2
罪	6	時間	4	内容	2
乳児	6	種類	4	部分	2
良い	6	準備	4	分かる	2
関わる	5	書き方	4	OR	1
宿泊	5	生活	4	いつ	1
書く	5	書く	4	アレルギー	1
強く	5	知的	4	オリ	1
知る	5	特徴	4	利用	1

※K-Coderによる「抽出語リスト」より筆者作成
出現回数1位～30位までを抽出

表3 2018年度(保育実習Ⅰ) 自由記述抽出語一覧

(項目1)		(項目2)		(項目3)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保育	12	保育	11	特に	3
指導	11	部分	6	不安	2
不安	9	手遊び	5	部分	2
部分	7	知る	5	無い	2
全日	6	子ども	4	園長	1
心配	5	言う	3	起こる	1
日誌	5	特徴	3	検便	1
分かる	5	乳児	3	時々	1
実習	4	発達	3	症状	1
書き方	4	良い	3	上記	1
書ける	4	ピアノ	2	心配	1
朝	4	覚える	2	進める	1
起きる	3	仕方	2	誓約	1
子ども	3	思う	2	先生	1
施設	3	指導	2	全日	1
書く	3	施設	2	障がい	1
生活	3	書き方	2	内容	1
設定	3	設定	2	日誌	1
先生	3	全日	2	半日	1
全て	3	たくさん	1	貧血	1
流れ	3	もう少し	1	怖い	1
良い	3	やり方	1	風	1
メモ	2	タイミング	1	変わる	1
関わり	2	ニーズ	1	保育	1
言う	2	一つ	1	名前	1
時間	2	回す	1	良い	1
実感	2	回数	1	養育	1
手遊び	2	各自	1		
寝坊	2	学ぶ	1		
体力	2	居る	1		

※KHCoderによる「抽出語リスト」より筆者作成
出現回数1位～30位までを抽出

表2 2016年度 自由記述抽出語一覧

(項目1)		(項目2)		(項目3)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
不安	18	知る	9	実習	4
実習	13	保育	8	コミュニケーション	3
施設	12	施設	7	行く	3
心配	11	ピアノ	6	人	3
保育	11	実習	6	ボランティア	2
思う	10	子ども	5	気	2
行く	8	乳児	5	苦手	2
子ども	8	思う	4	思う	2
ピアノ	7	手遊び	4	施設	2
日誌	6	知的	4	少し	2
知的	5	もう少し	3	接す	2
関わる	4	何時	3	洗濯	2
宿泊	4	気	3	特に	2
乳児	4	障害	3	不安	2
分かる	4	接す	3	保育	2
ボランティア	3	勉強	3	良い	2
一緒	3	用意	3	スーツ	1
言う	3	絵本	2	メモ	1
考える	3	具体	2	可能	1
子	3	行く	2	楽しみ	1
事前	3	持つ	2	活動	1
持つ	3	車	2	関わり	1
自分	3	種類	2	関係	1
失敗	3	詳しい	2	頭	1
書ける	3	障る	2	月	1
障る	3	生活	2	嫌	1
障害	3	設定	2	今	1
先生	3	洗濯	2	仕方	1
対応	3	対応	2	使用	1
知る	3	強く	2	子ども	1

※K-Coderによる「抽出語リスト」より筆者作成
出現回数1位～30位までを抽出

表4 2018年度(保育実習Ⅱ・Ⅲ) 自由記述抽出語一覧

(項目1)		(項目2)		(項目3)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
実習	16	利用	8	特に	7
ピアノ	8	保育	7	事前	3
保育	6	教材	4	指導	2
行う	4	研究	4	場合	2
子ども	4	年齢	4	良い	2
体調	4	勉強	4	OR	1
通勤	4	勤務	4	いつ	1
関わり	3	子ども	3	アレルギー	1
期間	3	施設	3	オリ	1
思う	3	時間	3	コミュニケーション	1
時間	3	実習	3	ピアノ	1
設定	3	準備	3	ボランティア	1
強く	3	知る	3	可能	1
年次	3	発達	3	怪我	1
不安	3	流れ	3	起こす	1
話す	3	ピアノ	2	苦戦	1
利用	3	以前	2	言う	1
学習	2	季節	2	実習	1
学園	2	思う	2	巡回	1
企業	2	指導	2	処置	1
急	2	手遊び	2	先生	1
緊張	2	宿泊	2	続ける	1
近い	2	書き方	2	対処	1
計画	2	障害	2	内容	1
今	2	場合	2	病気	1
退む	2	設定	2	分かる	1
受ける	2	対応	2	方法	1
心配	2	大切	2	無い	1
生活	2	願べる	2		
知る	2	日誌	2		

※K-Coderによる「抽出語リスト」より筆者作成
出現回数1位～30位までを抽出

4) 結果分析

全体的な傾向として、「指導」や「部分」、「全日」といった指導案に係る単語をどの年度についても確認することができた。また、「施設」や「知的」といった施設実習に関わる単語が多く見られたことは、A校において保育所実習と施設実習が同時期に実施されること、またカリキュラム上障がいや社会的養護について学習する中で施設実習に行く必要があることから、漫然とした不安を実習に対して抱えているであろう事が理解できた。

同時に、先行研究に見られたような「ピアノ」や「手遊び」といった日々の保育活動に直接結びつく様な保育技術について不安を抱えていることも明らかとなった。一方で先行研究にあるような子どもたちや実習園の先生方とのコミュニケーションや人間関係に関わるような言葉はあまり多く見受けられなかった。

またいくつかの年度で特徴的な単語についても確認することができた。

2018年度の初めて実習に行く学生たちに特徴的であったのが「朝」と「起きる」という単語であった。これは実習そのものの内容というよりも、自身の生活習慣を鑑みた際に生活面での不安があると感じているのではないかと思われる。

また、同じく2018年度実施の保育実習Ⅱ・保育実習Ⅲに向かう学生の不安要素は、より実習に必要な具体的な内容であるとともに、これまでの実習経験を生かした必要感（子どもの発達に合わせた教材研究や発達理解が必要であると感じている）が学生の中で芽生えていると考えられる。

5. おわりに

本稿では、厚生労働省通知によって示されている保育実習指導の目的から、保育（教育）実習に関する不安の先行研究、またA校で実施した自由記述方式の調査をもとに保育実習に向かう学生の不安について考察を行ってきた。

前述のように厚生労働省通知では保育実習指導の内容として、保育実習の意義や目的を学生に理解させ、実習中に必要とされる計画・実践といった保育実習で学ぶべき内容についてより詳しく教授する必要があると示されている。

一方で、実習前に学生が不安と考えている内容は日誌や指導案作成、また手遊びやピアノといった保育実践技

術に関する内容などが主であった。さらに、実習先での人間関係やコミュニケーション、さらには自身の体調管理など厚生労働省がその事前指導の内容としている保育実習指導で教授すべきとしている内容では補えない部分も多くみられるようであった。

A校での調査においても全体的に日誌や指導案作成といった「文書作成を伴う実習内容」に対する不安が多く見られ、それに続き手遊び、ピアノといった「実技を伴う実習内容」に関する不安が挙げられる傾向にあった。

日誌の記入や指導案の作成といった課題については経験的に、また数々の研究の中でも、実習に向かう前の学生たちの不安は高いと考えられてきた。そのため、多くの養成校で保育実技に関する教科目について充実を図り、一般的に「書き物が苦手」な現代の学生たちに対応できるよう様々なカリキュラム上の工夫や授業内での工夫がなされてきた。この様に学生が不安に感じている内容と養成校で工夫をしようと努力している内容について、一定一致していると考えられる。

全国保育士養成協議会が2007年に発刊した「保育実習指導のミニマムスタンダード」の巻頭言には「近年、全国的に保育士養成校の新設が増加している中で、多様な学生に対応する有効かつ効率的な実習指導体制を構築する必要性もまた生じてきている。」と述べられていた²⁵⁾。さらに、同養成協議会が2018年に発刊した「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2」の巻頭言には「『保育実習』『保育実習指導』は保育士養成の要であり、保育者としての魂を育成する最も大切な要素である。養成校の実習指導者と受け入れ先の実習施設が協働して実習指導にあたる道をさらに深めていくことが求められている。」と述べられている²⁶⁾。

これから保育者養成教育の質も求められる中、まずは養成校教員同士の協働、さらに実習現場との協働を志向しながら、「多様な学生のニーズ」に応えるための教育、研究を展開する必要があると考えられる。

今回、本研究において学生の实習前不安が多岐にわたっていることが明らかになった。厚生労働省通知において教科目としての「保育実習指導」内で学生に教授すべき内容は示されているが、学生が感じている不安を解消するにはあまりにも設定されている授業回数が少ないと感じられる。従って、学生の不安を解消するには前述のように他の授業担当者や養成校において学生指導に当たる教員がそれぞれ実習に対する意識を持ちながら、日頃の指導を通じて「実習における文書作成」に関わる内容

や「実習時に活用できる実技」などをカリキュラムに組み入れていくことが、学生の実習前不安の軽減につながるのではないと思われる。

本研究においては、学生の自由回答調査について単語の出現頻度数のみの検討となっている。今後はさらにデータの蓄積を行い、クラスター分析や因子分析の手法を用いて学生のニーズを客観的なエビデンスに基づいて把握し、事前指導に生かしていく必要があると考える。これらの内容については今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」 子発0427第3号 平成30年4月27日
- 2) 国立情報学研究所 <https://ci.nii.ac.jp/> 2018/09/25確認
- 3) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」 子発0427第3号 平成30年4月27日
- 4) 厚生労働省 子ども家庭局長「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正について 子発0427第3号
- 5) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(別紙2) 保育実習実施基準 子発0427第3号 平成30年4月27日
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(別紙3) 教科目の教授内容 子発0427第3号 平成30年4月27日
- 9) 同上
- 10) 中原大介(2015)「保育実習事前指導に関する一考察」『福祉健康科学研究』、10、p.80-p.88
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 岡本弘子(2012)「実習に対する保育専攻学生の意識についての一考察」『静岡英和学院大学 静岡英和学院大学短期大学部 紀要』、10、p.73
- 15) 守屋 操 井山房子 古埜弘子 白神繁子 平松由美子 馬場訓子 高橋 慧(2017)「幼稚園教育実習の事前指導の在り方を探る—実習前の学生の心情から—」『くらしき作陽大学 作陽音楽短期大学 研究紀要』、50、p.8-p.13
- 16) 金子智栄子 金子功一 佐藤広崇(2014)「保育実習生のストレス対処に関する研究：4年制養成課程の学生における実習中の困難対処について」『文京学院大学人間学部研究紀要』、15、p.52-p.53
- 17) 大和田明見 関根美保子 鈴木春江(2014)「保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化」『帝京大学教育学部紀要』、2、p.280
- 18) 山本 学 中澤秀一(2014)「保育実習指導における「学びの共有」の有効性—保育実習を終了した学生と保育実習前の学生間での試み—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』、28、p.3
- 19) 渡邊 舞(2018)「保育者養成課程校で学ぶ「専門学校生」は実習に対してどのような不安を感じているのか—実習不安尺度の作成と自己効力感の関連—」『豊岡短期大学論集』、14、p.350-p.355
- 20) 田中浩二 馬場康宏(2016)「幼稚園・保育実習に対する短期大学生の不安感：不安感構成要因の学年による差異の検討」『東京成徳短期大学紀要』、49、p.52
- 21) 岩崎桂子(2009)「保育実習に関する不安調査からの一考察」『研究紀要(小池学園)』、2、p.3
- 22) 三澤 恵(2015)「保育者養成校の学生の実習における対人コミュニケーション不安の考察：乳幼児・保育者・保護者に対するコミュニケーション不安の自由記述の分析」『子ども未来学研究』、10、p.23-p.34
- 23) 吉田康成(2009)「実習不安の内容と変化(Ⅱ)」『教育実践紀要』、創刊号、p.31-p.38
- 24) 樋口耕一氏作成によるフリーソフトウェア <http://kxcoder.net/> 2018/09/25
- 25) 全国保育士養成協議会編(2007)『保育実習指導のミニマムスタンダード 現場と養成校が協働して保育士を育てる』、北大路書房、p. i
- 26) 全国保育士養成協議会編(2018)『保育実習のミニマムスタンダード Ver.2 「協働」する保育士養成』、中央法規、p. i

【参考文献】

- ・ 社団法人 全国保育士養成協議会専門委員会編著(2015)『専門委員会課題研究報告書学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方—保育実習指

導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に』、社団法人全国保育士養成協
議会。

A Study on Pre-Training Anxiety among Nursery Teacher Trainees

Daisuke NAKAHARA

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

Abstract

This paper examines the anxieties experienced by nursery teacher trainees before practical training. First, we discuss 2018 reforms of Standards for Implementation of Practical Training of Nursery School Teachers. There is a need for implementation of practical training in nursery schools with respect to Standards for Implementation of Practical Training of Nursery School Teachers in the designated facilities for training nursery teachers. It is essential that students are dispatched to schools after acquiring a solid understanding of the meaning and purpose of practical training in nursery schools through the above-mentioned standards. Reforms of implementation standards have further increased the need for collaboration in schools and among faculty members at training facilities. “Collaboration” is increasingly being considered indispensable for cultivation of nursery teachers as human resources with higher levels of practical ability. According to the actual training guidelines, there is also a need to inculcate the comportment etc. expected of functional contributing members of society and this starts at the practical training stage, in particular by reducing or eliminating students' anxieties.

Based on data from a number of studies on anxiety related to nursery school education training, we investigated what kinds of anxieties students were experiencing. Also, we analyzed self-administered questionnaires obtained in training schools and discussed the results.

The data showed that students exhibited significant pre-training anxiety for daily journal and teaching plan related activities or for piano related training. Future challenges include examining measures for further enhancing practical training and related guidance based on objective evidence such as that presented above.

KEY WORDS : Nursery teacher training programs,

nursery school education related training and guidance, anxiety